

いじめ問題に対する基本的考え方

いじめの定義

(文部科学省)

いじめとは、「子どもが一定の人間関係のある者から、心理的・物理的攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」で、いじめか否かの判断は、いじめられた子どもの立場に立って行う。

(いじめ防止対策推進法第2条)

この法律において「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等「当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの」をいう。

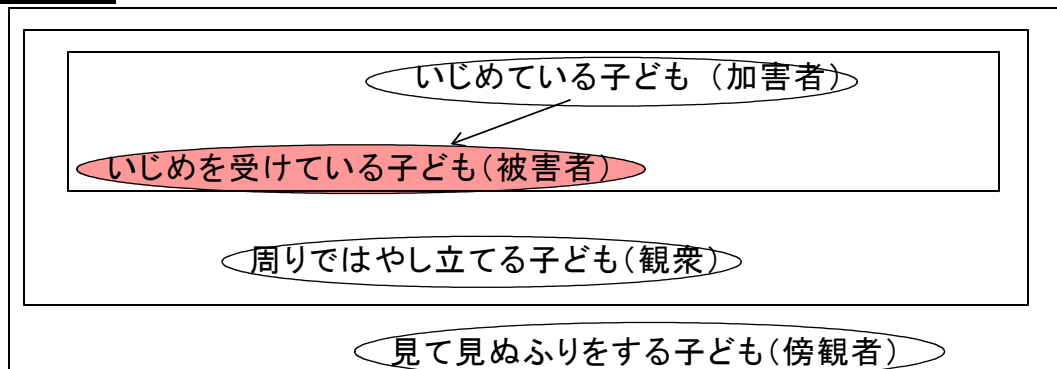
いじめへの対応姿勢

「強い・弱い」等の印象や子どもの様子、回数にとらわれ、表面的・形式的に深刻さを判断することのないよう、いじめられた子どもの立場に立って判断する。

いじめの基本認識

- いじめは人間として絶対に許されない。
- いじめられている子どもを必ず守り通す。
- いじめは重大な人権侵害である。
- 暴力をふるう、金品を盗む、金品をたかる、誹謗中傷などは犯罪行為である。

いじめの基本構造



いじめの態様

- 冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、いやなことを言われる。
- 仲間はずれ、集団による無視をされる。
- 軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする。
- ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする。
- 金品をたかられる。
- 金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする。
- いやなこと、恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする。
- パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷やいやなことをされる。 等

いじめの未然防止

◇ いじめを許さない学校・学級づくりのポイント

- 1 教師の人権意識
- 2 いじめを許さない子どもを育てる教育活動
- 3 いじめの早期発見・早期対応に向けた組織的・計画的な取り組み
- 4 教育相談の充実

◇ いじめを許さない学校・学級づくりの手立て

- 1 子どもに対する教師の受容的、共感的態度 ⇒ 子ども一人一人のよさを発揮
⇒ 互いを認め合う学級
- 2 子どもの自発的、自治的活動を保障 ⇒ 規律と活気のある学級集団
⇒ 正しい言葉遣いができる集団
- 3 児童の実態を定期的把握（アンケート調査）⇒ 早期発見、早期対応、早期解決
- 4 生徒指導の機能を生かした授業づくり ⇒ 「楽しい授業」「わかる授業」
⇒ 子どもたちの学び合いを保障
- 5 道徳指導計画にいじめを題材に位置付け ⇒ いじめを許さない心の育成
人権意識の高揚
- 6 学級活動での話し合い活動 ⇒ 学級の諸問題の解決
⇒ 人間関係のトラブル対処法
- 7 子ども主体の学校行事・児童会活動 ⇒ 子どもが主役の活動

いじめの早期発見

- 教師と子どもとの日常の交流を通して
- 複数の教員の目を通して
- アンケート調査を通して（学期の調査、月のミニアンケート）
- 教育相談を通して

＜いじめの情報（気になる情報）のキャッチする手段＞

- いじめが疑われる言動を目撃
- 生活ノート等から気になる言葉を発見
- 子どもや保護者からの訴え
- アンケート調査に記述内容から発見
- 児童クラブ指導員・地域住民からの情報
- 同僚からの情報
- 健康観察による確認

いじめの早期対応

1 全職員による臨時生徒指導会議の開催（生徒指導委員会）

(1) 情報の整理

- ・ いじめの態様、関係者、被害者、加害者、周囲の子どもの特徴

(2) 対応方針

- ・ 緊急度の確認「自殺」、「不登校」、「脅迫」、「暴行」等の危険度を確認
- ・ 事情聴取や指導の際に留意すべきことを確認

(3) 役割分担

- ・ 被害者からの事情聴取と支援担当
- ・ 加害者からの事情聴取と指導担当
- ・ 周囲の児童と全体への指導担当
- ・ 保護者への対応担当
- ・ 関係機関への対応担当

2 事実の究明

- ・ いじめの状況、いじめのきっかけ等
- ・ 聴取は、被害者→周囲にいる者(冷静に状況をとらえている者)→加害者

＜事情聴取の際の留意事項＞

- 被害者の子どもや、周囲の子どもからの事情聴取は、人目につかないような場所や時間帯に配慮して行う。
- 安心して話せるよう、その子どもが話しやすい人や場所などに配慮する。
- 関係者からの情報に食い違いがないか、複数の教員で確認しながら聴取をすすめる。
- 情報提供者についての秘密を厳守し、報復などが起こらないように細心の注意をはらう。
- 聴取を終えた後は、当該児童を自宅まで送り届け、教師が保護者に直接説明する。

＜事情聴取の段階ではないこと＞

- ▲ 被害者の子どもと加害者の子どもを同じ場所で事情を聴くこと。
- ▲ 注意、叱責、説教だけで終わること。
- ▲ 双方の言い分を聞いて、すぐに仲直りを促すような指導をすること。
- ▲ ただ単に謝ることだけで終わらせること。
- ▲ 当事者同士の話し合いによる解決だけを促すような指導を行うこと。

3 いじめの被害者、加害者、周囲の児童への指導

(1) 被害者への対応

【基本的な姿勢】

- いかなる理由があっても、徹底して被害者の子どもの味方になる。
- 子どもの表面的な変化から解決したと判断せず、支援を継続する。

【事実の確認】

- 担任を中心に、子どもが話しやすい教師が対応する。
- いじめを受けたつらさにじっくりと耳を傾け、共感しながら事実を聞いていく。

【支援】

- 学校は、いじめている側を絶対に許さないことや今後の指導の仕方について伝える。
- 自己肯定感の喪失を食い止め、子どものよさや優れているところを認め、励ます。
- いじめている側の子どもとの今後の付き合い方など、行動を具体的に指導する。
- 学校は安易に解決したと判断せず経過を見守ることを伝え、いつでも相談できるように学校や信頼できる教師の連絡先を教える。
- ▲ 「君にも原因がある」、「がんばれ」などという指導や安易な励ましはしない。

【経過観察】

- 生活ノートの交換や面談等を定期的に行い、不安や悩みの解消に努める。
- 自己肯定感を回復できるよう、授業、学級活動等での活躍の場や、友人との関係づくりを支援する。

(2) 加害者(いじめた子ども)への対応

【基本的な姿勢】

- いじめを行った背景を理解しつつ、行った行為に対しては毅然と指導する。
- 自分はどうすべきだったのか、これからどうしていくのかを内省させる。

【事実の確認】

- 対応する教師は中立の立場で事実確認を行う。
- 話しやすい話題から入りながら、うそやごまかしのない事実確認を行う。

【指導】

- 被害者の辛さに気付かせ、自分が加害者であることの自覚をもたせる。
- いじめは決して許されないことをわからせ、責任転嫁等を許さない。
- いじめに至った自分の心情やグループ内等での立場を振り返らせるなどしながら、今後の行動の仕方について考えさせる。
- 不平不満、本人が満たされない気持ちなどをじっくり聴く。

【経過観察等】

- 生活ノートや面談などを通して、教師との交流を続けながら成長を確認していく。
- 授業や学級活動等を通して、エネルギーをプラスの行動に向かわせ、よさを認めていく。

(3) 観衆、傍観者への対応

【基本的な指導】

- いじめは、学級や学校全体の問題として対応していく。
- いじめの問題に、教師が児童とともに本気で取り組んでいる姿勢を示す。

【事実確認】

- いじめの事実を告げることは、「チクリ」などというものではないこと、辛い立場にある人を救うことであり、人権と命を守る立派な行為であることを伝える。

【指導】

- 周囲ではやし立てていた者や傍観していた者も、問題の関係者として事実を受け止めさせる。
- 被害者は、観衆や傍観者の態度をどのように感じていたかを考えさせる。
- これからどのように行動したらよいのかを考えさせる。
- いじめの発生の誘引となった集団の行動規範や言葉遣いなどについて振り返らせる。
- いじめを許さない集団づくりに向けた話し合いを深める。

【経過観察等】

- 学級活動や学校行事等を通して、集団のエネルギーをプラスの方向に向けていく。
- いじめが解決したと思われる場合でも、十分な注意を怠らず、継続して指導を行っていく。

4 保護者との連携

(1) いじめられている子どもの保護者との連携

- 事実が明らかになった時点で、速やかに家庭訪問を行い学校で把握した事実

を正確に伝える。

- 学校として徹底して子どもを守り、支援していくことを伝え、対応の方針を具体的に示す。
- 対応経過をこまめに伝えるとともに、保護者からの子どもの様子等について情報提供を受ける。
- いじめの全貌がわかるまで、相手の保護者への連絡を避けることを依頼する。
- 対応を安易に終結せず、経過を観察する方針を伝え、理解と協力を得る。

(2) いじめている子どもの保護者との連携

- 事情聴取後、子どもを送り届けながら家庭を訪問し、事実を経過とともに伝え、その場で子どもに事実の確認をする。
- 相手の子どもの状況も伝え、いじめの深刻さを認識してもらう。
- 指導の経過と子どもの変容の様子等を伝え、指導に対する理解を求める。
- 誰もが、いじめる側にも、いじめられる側にもなりうることを伝え、学校には事実について指導し、よりよく成長させたいと考えていることを伝える。
- 事実を認めなかったり、うちの子どもは首謀者ではないなどとして、学校の対応を批判したりする保護者に対しては、あらためて事実確認と学校の指導方針、教師の子どもを思う信念を示し、理解を求める。

6 関係機関との連携

連携を必要とする状況	関係機関
<ul style="list-style-type: none">・ いじめの発見状況を報告する。 (定期報告 年3回 いじめ報告)※ 発生時・経過・終了報告 (いじめ発生時)・ 対応方針について相談したい。・ 指導方針や解決方法について相談したい。・ 子どもや保護者への対応方法を相談したい。	町教育委員会 (会津教育事務所) S C S S W
<ul style="list-style-type: none">・ いじめによる暴行・傷害事件、強要・強制わいせつ、恐喝、窃盗・器物損壊等の刑事事件が発生している。	警察署 児童相談所
<ul style="list-style-type: none">・ いじめられた子どもが外傷や心的外傷を負っている。	医療機関 町教育委員会 会津教育事務所
<ul style="list-style-type: none">・ いじめられた子ども、いじめた子どもの心のケアが必要である。	会津教育事務所 児童相談所